

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年7月 NO.198



[もくじ]

- 2～3 美術が与えてくれたこと…山崎晴奈
- 4～5 心の成長…西本一弥
- 6～7 「今夜はジビエを食べて帰ろうよ」…西村直子
- 8～9 「コトバの世界」…丁野博行
- 10 「アンテナ」スッポン釣り師匠「浅野さん」との出会い…下尾仁
- 11 ジョン・ケアード演出 ハムレット
- 12～13 高知市文化振興事業団4～6月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

美術が与えてくれたこと



山崎 晴奈

私は、絵が好きだ。その思いはきつと一生変わらない。今回この執筆の機会をいただいて、絵と一緒に歩んできたことを振り返り、改めてその有り難さに気づかされた。今まで制作を通して得られた経験を綴りたい。

ごはんを作っている。父も母も、自分のためではなく相手のために真剣にものを作る人だったと思う。

「幼いころを振り返って」

描くことはずっと好きだった。ノート、落書き帳、チラシの裏：それらがなくなると、ティッシュ箱からティッシュを出し、一枚一枚ボールペンでイラストを描いていき、周りにはいつの間にかイラスト入りのティッシュの山ができていたこともあった。へたくそだったが、とにかく夢中で何かを描いていた。

【両親】
私が絵を好きになったのは両親の影響が大きいと思う。父は大工。兄や私のために遊具を作ってくれたり、二段ベッドを作ってくれた。家や大きな家具をまるで魔法のように作ってしまう父は、ずっと私の自慢だった。母は、とにかくパワフルな人で、勤めながら家事もこなし、それでいて驚く程のペースで雑貨や作品を次々と作ってしまう人だ。夜通し作品を作る日があっても、朝には家族の

もともと内気だった私は自分に自信がなく、自己主張が苦手な子だった。やんちゃな子に描いた絵を目の前で破かれても、傷ついていくくせに何も言えなかった。今も、嫌なことが起こっても笑って

我慢してしまう場面が多い。それでも自己表現が少しずつできるようになったのはやっぱり絵のおかげだと思う。特に、制作活動をする上では、内気な自分にフオーカスを当てていられない。たとえ弱気であっても、自分を信じて進めていかないと。

今、マイクを持って大勢の方々の前で自分の作品の解説をしたり、時に告知のためにメディアに出させてもらったりしているが、昔を思うと信じられないことづくしである。制作活動をしていなかったらこんな自分は出てこなかったはずである。

【学生時代】

大学受験は一浪し、仲隆三先生のもとでデザイン・着彩を学び、再度挑戦して進学した。高知大学の美術を学ぶことができるコース。ここで油絵を本格的に学びたかったのだ。

とにかく中身の濃い四年間だった。クラスメイト達は各々ユニークな世界観を持ってい



「EYES ON ME」
2017年2月制作 アクリル着彩 S20号サイズ
第37回女流展（青潮賞と県美術振興会奨励賞を頂きました）

て、毎日刺激的で楽しかった。また良き先輩、後輩にも恵まれ、沢山笑い、自分の気持ちを開放できた日々だった。そしてその中で、挫折と呼べる経験もできてよかった。

西洋画専攻を熱望していたが、専攻から外れてしまったのだ。きつと先生方の正しい判断だったと思う。子供の私に、大人の世界の背景は分からなかった。張り出された紙で結果を知り、そのショックはすさまじく、当時の私には受け止めきれなかった。油絵を専門的に学びたくてこの大学を目指した。努力もしていたつもりだった。正直自信もあった。私にはこれし

かないのに、それを否定されたらもう私には何も残っていない。自己否定感が全身を縛り、息をするのも苦しいほど精神的に大変なことになってしまった。そして描く自信をすっかり無くした私は、絵をやめようと思った。

でも結局のところ、どうしてもどうしてもあきらめられなかった。目の前が真っ暗なまま筆をとって、泣きながら描いた記憶がある。暗く長いトンネルだったが、一枚の絵ができた。そしてその絵が女流展で入選したとき、やっと一筋の光が差した気がした。〃やっぱり描きたい、描いていきたい〃と自分の気持ちを再確認できた。もう一回出直そう。それからは以前の倍、本気で描くようになった。なんでもいいから挑戦しようと、学外への公募に出展し、講評の機会があれば先生方の後についてメモを取ってまわった。今思えば、高知市展へのつながりや女流展、県展への挑戦など、今現在につながる美術活動への道を築いてくれたのもこの時期である。甘かった私に鞭を入れてくれた。

学校では金属工芸を学び、家に帰ったら絵を制作するという、慌

ただしく充実した時間を過ごした。また石川充宏先生という素晴らしい先生と、努力家でバイタリテイ溢れる専攻仲間と共に過ごせたことも本当に幸せだった。制作の喜びを今一度噛みしめ、美術がもつと好きになった。十年たった現在もこの時感じた思いは大きく、決して忘れてはいけなと思っています。おかげで社会人になった今も制作を続け、心はいつも美術中心で回っている。

【社会人になって】

沢田マンシヨンギャラリーでの経験では特に、自分の展示会に責任を持つことの意味を痛感した。個展のたび、無限に課題が生まれていった。また出会いも増え世界が広がり、その都度新たな目標も生まれていった。

ここ最近の変化では、ベリーダンスをはじめた影響もあり以前よりも使用する色が増えたと思う。それまではダークトーンを主軸とした作品が多かったのだが、きらびやかな色の世界

に触れ、明るい色も心地良く思えるようになり、同時に作品に使う色数も増えていった。丁度その変化の時期に、ありがたいことに女流展で賞をいただき、講評では色を評価していただいた。今後どういう表現をしていくのか分からないが、このことを励みに、女性らしい色使いも開放して、内面世界を表現できたらと思っている。

【これから】

高知の文化活動は豊かだと思う。南国土佐の熱い気質なのか、美術に限らず音楽や演劇、ダンスなどに表現することに情熱を燃やし輝いている人が多いように思う。そのような人達に触れるたび、自分も頑張らなくてはと心が燃える。私もここ高知で、エネルギー溢れる



「久」
2017年1月制作 油彩 F 100号
県展70回記念 選抜作家展出展

表現者の一人になっていきたい。そして、いつか子ども達に絵やもののづくりの楽しさを教えるのも私の夢だ。

社会的にはもう落ち着かなくなはいけない歳だが、まだまだしたいことが溢れてきている。限りある時間の中、本当にしたいことのために何かを制限する場面も出てきてしまったが、今も新たな目標に向かい、不器用ながら地道に励んでいる。

私は絵を好きになったおかげで、これまで様々な経験ができた。これまでの道のりを作ってくれたすべての人や出来事に感謝している。またこれまでの経験を通して、制作する上で、内面的な脆さが作品づくりの足枷になるもつたいなさも知った。自分の時間は限られている。自分を信じ、笑顔で課題を乗り越えていけるような、強く野性的な作家になっていきたい。

やまさき はるな

一九八五年高知県生まれ、土佐市在住。高知大学教育学部芸術文化コース美術卒業。

心の成長

西本 一弥

(というよりは本番に向けて) 没頭していました。

と、演劇に没頭していた時期でした。

二十三歳の頃。はじめて演劇に本格的に関わりだしました。フリターだった頃の僕はこれから対する不安とか迷いとか、何かしていないとそういうものに埋め尽くされてしまいそうだったので、前から興味があった演劇という世界に現実逃避をするように飛び込みました。この文を書くにあたって、その七年間を思い返してみましたが、意外といろいろありまして、あとその時々で考えていることもいろいろ違って、文系教科がどれも苦手だった僕はとてもじゃないですがまとめ

れません。ので、今回はだいたいこのくらいの時にどんなことを考えていたのかを思い出しながら書いてみようと思います。

始めたばかりの頃は、とにかく本番が楽しみでした。本番で自分が知らないことを覚えて、実践して、ちょっと役に立てて、それが嬉しくて楽しくて。次の本番はいつだろう、次は何をやるんだろうとワクワクしながら、掛け持ちしていた二つのアルバイトをこなし、これから先の自分の生活に見え隠れする不安を蹴散らして演劇に

いや、ちゃんと仕事しろよお前、ってその頃の自分に言ってやりたいところなんです、実はそのちよつと前に、近い親族があっけなく病死し、高校の同級生が突然に自殺して、訃報が立て続けに飛び込んできた時期でした。「生きる」とか「生きていく」っていうことの意味がわかんなくなっちゃったんですね。どうしても理由を探さずにはいられなくて。その「生きる理由」になつていたのが演劇でした。本番に向かう僕たちの大きな船を動かす歯車の中に、自分が組み込まれていること、そこに生を見出していたんです。どうしても「何のためにいるのかわからない人間」にはなりたくなかった。演劇をしている間は少なくとも「何かのための人間」でいられた。だからこの先の生活や同世代とのギャップに不安を感じながらも、「明日死ぬかもしれないなら、やりたいことをしていよう」

話がちよつと逸れちゃいますが、「演劇」と一言で言っても、作家や演出家、役者、大道具小道具、照明、音響、衣装、制作などなどいろいろ役割があります。僕が所属した劇団は役者と制作以外はあまり役割は決まっておらず、特になどの役割がしたいというものもなかったのも、入団してからは音響を担当していました。でもこれだけ役割があつたらちよつと他のポジションも気になつてきてしまひまして、何を血迷ったのか僕は作家に挑戦しようと急に思い立ちます。そして何の考えもなしに台本というものを初めて書きました(今考えるとどうして書けたのか不思議でならないですが笑)。

そのときの台本の中には「あつてなく死んでしまった人」と「自分から死んでしまった人」が出てきていました。やっぱりなかったことにはできなくて、忘れること

ができない二人はずっと僕の中で居心地悪そうにしていました。そんな二人の居所を、舞台にすることで見つけようとしていたのかもしれない。救いを求める祈りのような、見えない居所を、当時の劇団員の方の力を借りて現実の世界に放り投げました。「僕はこう思っただけです」と。でも、現実の世界に出てきたそれは、自分が思っていたものとは違うものでした。

実は、台本が出来上がって台本の最後に「終」と打った時点で、僕は二人の居場所を見つけていました。それから本番までの作業は、「誰かに届け続ける」というもの。役者さんに、照明さんに、広報担当の人に、ひたすら伝える。そして、全員で込めた思いを観客の皆さんに届ける。上手いかなかったのはこの部分で、そしてそれは僕の未熟さが原因であることを突きつけられました。初めて経験した「楽しむことができなかった舞台」でした。

当然、二人の居場所が見つかった満足感よりも、納得いくものが出来なかったことの悔しさの方が前に出てきます。ホントに悔しくて悔しくて、さっきの二人が逆に憎たらしく思えてきたんです。「二人は満足そうなのに、生きてる俺が一番不満そうってなんなんだよ！」って（笑）。それからは「今生きている自分のために自分がしたいことをする！」をモットーに、先のリベンジを果たすべく行動を開始します。高知で活動しているいろいろな劇団や事業に関わりながら、実現するための方法を探そうになりました。収入と、演劇を行う時間をより確保するためにバイトを辞めて就職したのもこの時期。そして二年后、僕は劇団外で繋がった人たちと一緒にユニットを作り、「今」をテーマに新しい台本を書いて本番に挑みます。所属している劇団ではなく新しいユニットを作ったのは「最後まで自分で責任を持つための方法」だと思ったから。集まってくれたメンバーで一から作品づくりを行う

のは初めてだったので、かなり過酷な現場にはなっていました。が、関わってきたどの舞台よりも、今までやってきてよかった、と思えた舞台でした。

この公演が終わった後で、僕は「何かのため」ではなく、「自分のため」に生きられるようになっていたことに気が付きます。二十八歳、秋がもうすぐ終わろうとしている頃でした。

それからさらに二年がたった現在、今自分が感じていること、周りにあることを材料に、演劇というものに取り組もうと試みています。チャレンジすればするほど「自分が思っている以上に自分はなんにも感じていないこと」に気づかされて、へこむことの方が多いですが、充実感と物足りなさのいいバランスの中で毎日を過ごせています。

これは余談なんですけど、実は最近「自分のため」から「自分たち

のため」へと生き方、考え方が変わっているのを感じています。「明日死んでしまってもいいように」と考えていた自分が、「何年後も生きていられるように」と生き方を顧み始めてたりしています。これから先、どのくらいの時間が僕にあるのかわかりませんが、演劇をしている時間や、そうでない毎日や、特別な日のなかで起こるであろう「想像もつかないようないろんなこと」を想像すると…ワクワクが止まりません。

にしもと かずや

一九八七年生まれ三十歳。東京都出身。劇団「シヤカ力」所属、演劇EYE、ユニット・バス代表。

「今夜はジビエを 食べて帰ろうよ」

西村 直子

皆さんは、「ジビエ」という言葉の意味をご存知でしょうか？ジビエとは山で狩猟された鹿や猪、鴨など、天然の野生鳥獣肉を意味するフランスの言葉です。中世ヨーロッパの王侯貴族が自分の領地で行った狩りで得た肉を使い、発展してきたジビエ料理は、長い間、貴族しか食べることができない高貴で高級な料理でした。

世界の肉の等級ランキング最高峰のシカは、丹波の松茸や高知の戻り鰯のように、フランスの秋の風物詩です。狩猟が解禁される十月になると、肉屋や市場の軒先に野生鳥獣が並びはじめます。毛つきのまま売られているうさぎは注文が入ってから、血を一滴も流さず数秒で全身の毛を剥がされ、美

しい精肉になります。高知で例えるならば、大正町市場の漁師の奥さんが、港に上がったばかりの魚を一瞬で刺身にする光景とまったく同じ。生き物が食材になる瞬間を見せられて「美味しそう」と感じるところに国境はありません。

また、肉屋や市場だけでなく、レストランの入り口には「シカ肉あります」と書かれた看板が掲げられ、地元だけでなく、海外からもジビエを目的とした美食家たちが来仏、ジビエはフランスの貴重な観光資源になっています。

シカやイノシシが高級なのはヨーロッパだけではありません。香港やシンガポールなどアジア各地ではシカは最上級の生薬として売られており、鹿茸（ろくじょう）

と呼ばれる鹿の袋角は三十万円、生殖器十万円、アキレス腱一万円（1キロ）など、大変高価です。私が長年暮らしたニュージーランドやオーストラリアでも、牛、豚、鶏と同じように牧場で育ったシカが選択肢のひとつに入っており、赤身でヘルシーなシカ肉は、牛肉以上の人気とお値段。私も仕事として調理するだけでなく、レストランへ食事にいくと、「シカのステーキ」を頻繁にオーダーするほど、シカ肉が好きでした。



このようにジビエの魅力を語り始めたらずまらないため、「お父さんが猟師なの？」「山の近くで育ったの？」「子供のときから食べていたの？」と聞かれることが多くありますが、答えは全て「NO」。高知の山にシカが生息していることを知ったのは、多くの方と同じく十年ほど前から始まった「食害問題」に関する報道からでした。

ただ、報道を見て、「天然のお肉が高知の山にたくさんいるなんて!!」「もったいない!!」と心を躍らせた高知県民は私一人だったかもしれません。（笑）

幼少の頃から外の世界への憧れが強かった私は、二十歳から世界中を周り、一九九八年から十二年間ニュージーランドとオーストラリアで暮らしてきました。どこの国でも私の関心は常に「食」と「人」。「美味しい」の笑顔は世界共通、そこに言葉は必要なく、食は最強のコミュニケーションツールでした。

昔から食えることが大好きな私は、見たこと、食べたことのない

食材や料理を見つけたら、試さずにはいられない食いしん坊。それも地元民が愛する「ローカルフード」には特に目がありません。

例えば、「孵化しかけのアヒルの卵（ベトナム）」や「牛アキレス腱のスープ（ジンバブエ）」、「山羊の頭の丸焼き（ケニヤ）」「血のソーセージ（ドイツ、フランス）」「渡り鳥ヒナの塩漬け（ニュージーランド）」なども夢中になって食べました。この中でも特に美味しかったのが、「孵化しかけの卵」と「渡り鳥ヒナの塩漬け」。

今、読んでくださっている皆様の中には、「孵化しかけの卵」と聞き、思わず眉をしかめた方もいらっしゃるでしょう。実際、この話をしますと、「うわあゝ、気持ち悪い!!」とおっしゃる方がほとんどです。

確かに「孵化」と聞くと恐ろしい感じがしますよね。しかし視点を変えようと、卵の殻の中に卵黄と卵白、肉しか入っていない、贅沢でピュアな卵と肉のスープ。ベトナムでは何日目の卵と注文することができ、私は中間くらいの卵が好きでした。この卵は美味しいだ

けでなく滋養強壮にも効果があるため、ベトナムに限らず、アジア各地で日常的に食べられています（余談になりますが、初心者の方には十一日目や十二日目の肉が少ないスープ状の卵をおすすめします）

反対に外国人から見た日本食はどうでしょうか。「納豆」、「梅干し」、「鯛のあら煮」「明太子」「ドロマ（生しらす）」などが、彼らにとって「ゲテモノ」の部類に入るでしょう。「孵化しかけの卵」に匹敵するのは、おそらく「鯛のあら煮」。魚の頭を箸でつつきながら、魚眼まで綺麗に食べる私たちを見たならば、「うわあゝ気持ち悪い!!」と眉をひそめるに違いありません。

このように日常の食事にも二面性があり、日本では害獣扱いのシカも国が変われば、「オーガニックでヘルシーな赤身肉」として貴重で希少な美味しい食材となるのです。

日本では害獣と呼ばれ厄介者扱いされているシカですが、「毒を

持っている」わけでも、「まずくて臭い肉」でもありません。ただ環境の変化により生態系のバランスが崩れ、人間が定めた適正頭数を超えてしまっただけなのです。

野山を自由に駆け巡り、食べたい時に食べたい餌を頬張り、ホルモン剤や抗生物質、ストレスとは無縁で育ったシカやイノシシは、肉はさっぱりとしているのに滋味深く、いくら食べても胃にもたれません。そして刺身や寿司の食文化を持つ私たち日本人は、魚と同様に肉の処理も丁寧で早いため、適正な行程で処理された肉は瑞々しく透明感があり、世界でもトップクラスの肉質と美味しさになるのです。そして、世界中見渡しても、日本のようにシカやイノシシが野山に溢れている国は他にありません。日本の山は宝箱なのです。

私が二〇一四年七月に開業したジビエ料理専門店「ヌックスキッチン」では、シカやイノシシ肉本来の美味しさが伝わるシンプルでカジュアルなジビエ料理を心がけています。

「今夜はジビエを食べて帰ろう

よ。」これが合言葉となる日まで、ジビエの魅力を発信し続けていきたいと思っています。



にしむら なおこ

高知市在住。

ジビエ料理専門店「ヌックスキッチン」オーナーシェフ。

「ゴッドベの世界」

十八歳で高知を出て、今年で二十七歳になりました。

現在は「Ten en」という名前のクリエイティブユニットを組み、都内を拠点に活動を行っています。

「Ten en」での創作はレザーを主なマテリアルとして用い、デザイン、アート両方の領域で様々な表現に挑戦しています。

作品にレザーを用いる理由として、レザーは長く愛用していくことで経年変化を楽しむことができるという点があります。

生活のなかで使用による汚れが目立つと、安価に新しいものをすぐに買い換えられるネットショップなどの流通システムが構築され

たことで、今の大量生産の世の中で生み出されるモノはどうしても使い捨てが前提のものが多いと感じます。

洗練されたモノが増えていく一方、モノに愛情を注ぐという時代から遠退いている気がして少し寂しい気持ちになりました。アートでもデザインでも経年変化を楽しめる素材を用いることで長く人の生活に寄り添うものを生み出せるのではと考え、その中でレザーという素材の様々な可能性を探求することになりました。

最近の作品の一つに、岩の形状を模した椅子で「ROCK」という

作品があります。

丁野 博行



ROCK

SNS、デジカメなどの普及により写真、思い出をデータとして管理することが当たり前となりつつある現代において、家具という媒体を用いることで思い出を視覚化し保存することができるのではないかと考えました。データで写真を管理することは便利ですが、昔のように現像することが減ったことで、思い出を振り返る機会も少なくなったように感じます。

そこで、レザーの性質を超アナログな記憶媒体と捉え、人が生きる時間軸に寄り添うように共に変化し続ける革製家具の提案です。

発達した写真や映像のように鮮明な思い出を映し出すことはできませんが、レザーの表面に残った様々な傷やシミから、それらが残る要因となった風景を記憶の中から再び思い描くことができます。

使い捨てが主流の現代において、レザーの持つ経年変化の味わいも合わせ、昔のように家具を永く愛し、生活空間に大切な思い出が蓄積されていく感覚を感じとることができるのではないのでしょうか。また、岩は川の上流から下流へと流れる間に、周りの環境に馴染

むように徐々に角が取れ丸く変化していきます。この作品も初めは素材の硬さのため角張ったフォルムですが、人の人生という時の流れに溶け込むことで、その生活環境に馴染むように徐々にふっくらとした柔軟な形状へと変化を続けます。

このようにレザーを用いた作品の可能性の一つとして、それらがおかれた環境によって多様に変化を遂げるため、作品の完成形が一つではないということがあります。外側を動物性のマテリアルで覆われることで、私たちと物質との狭間の不思議な存在として共に時間を歩み続けていきます。

こんな私の中学生の頃に思い描いていた夢は「カーデザイナー」で、理由は「なんとなくカッコいいから」という男の子にありがちな思いでした。

大学ではそんな夢を追いかけて、美大の工業デザインのコースに進路を決めました。入学早々あることに気がつきました。この頃は「カーデザイナー」をカッコいい存在だと感じる理由がある程度明

確にはなっていて、それは「自分がデザインした車を喜んで運転してくれている姿を見たいから」という思いに一応まとまったつもりになっていました。

そのためか、身の回りのありふれたモノ、例えば消しゴムや石鹸などは自分にとって「デザイン」の対象に入っておらず、漠然とわかりやすいカーデザインという存在に惹かれていて、根本の「自分の生み出したものを誰かに使ってもらいたい、誰かに喜んでもらいたい」という思いまで認識できていませんでした。その考えを大学で気づかせてもらえてからは視野を広め、日用品や家具などのデザインについて多くのことを学ばせていただきました。

恩師から伝えられた中でよく思い出す言葉の一つに、「モノよりもコトバを大切にしろ」と言われたことがあります。デザインを考える際にその「モノ」の外側のフォルムを追求するデザインも大切ですが、自身の「コトバ」なせこれを作ったか、これはなぜ必要なのか」が相手にわかりやすいデザインを心がけなさいと教えて

いただきました。様々な製品が溢れかえる世の中で、「親切かなデザインを行えば必ず相手にはちゃんと伝わる」という意味でした。

そんな学生生活を送る中で、ある日「コンセプチュアルデザイン」という言葉と出会います。これは欧州から広まった分野で、コンセプト、思想の構築をメインに考えるデザインで、私はアートとデザインの融合のように感じました。デザインとして分類はされていても、人が抱く疑問や思想を整理し、それらをきちんと再構築して纏う存在感到興味を持ちました。

大学卒業後は「コトバ」の世界をもっと知ってみたいと思い、チエコ共和国の首都のプラハにて現代彫刻のスタジオで勤務しました。彫刻の世界は立体物を作るという点では工業デザインと似てはいませんが、家具のデザインのような制限は何も無いため、製作者の思想などをより直接的にフォルムに描くことができます。デザインの分野ではありませんでしたが、ここで働くことで得た経験はアートとデザインという相反する世界を知

ることができ、私の中の「モノとコトバ」の世界観をより広げることができました。

このような経験をできたことで、私にとつてのクリエイションとは何かの土台を築けたように感じます。必ずしも生活を送る上で必要であるとは限らなくても、人の心に今の時代に必要ない芽生えさせることのできるデザインがあってもいいのではないのでしょうか。これからの親切なデザインを忘れることなく、「コトバ」を伝えていきます。

ちようの ひろゆき

高知市出身。都内を拠点に「G」[G]としてデザイン、アート両方の領域で活動中。

「アンテナ」

スッポン釣り師匠「浅野さん」との出会い

下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がろう。すると面白い事がやってくる。皆さんは、スッポンを食べた事がありますか？僕は四十五歳になるまで食べた事ありませんでした。

今から三年程前、僕の店の常連客、森沢君とスッポンを食べてみたいと話をしていると、ドッドツドツと大きな音をたてながら一台のバイクにまたがり初めて来店するお客さんがやってきた。

そのお客さんの名前は浅野さん。初めて来たお客さんなのに、先程までの話の流れからいらっしやいませと言うやいなや、スッポン食べた事ありますかと聞いてみた。すると、食べた事はないが釣った事があるとの事。しかも一匹や二匹ではなく、かなりの数を釣ってネットで販売していたとの事。

僕は先程までの話を浅野さんにし、もしよかったら僕達にスッポンを釣らせて下さいとお願いをしてみた。すると「全然いいよ、いつ行く」と、まだ出会って五分も経っていないのにスッポン釣りの師匠になってくれたのだった。

もちろん僕達の目的はネットで販売する事じゃなく、食べる事だ。そして仕掛けの作り方やエサは何かなどのスッポン談義に花を咲かせた。

浅野さんの年齢は六十歳だが実年齢よりとにかく若い。冬はスノーボードに明け暮れ、季節のいい時にはバイクを乗り回し、夏はジェットスキー。そしてトランポリン教室にも通い、とにかくじつとしていないイメージのないアクティブな人だ。

話はスッポンに戻るが、三日後にスッポンのいるポイントで待ち合わせる事になった。

そして当日、浅野さんに言われた準備物を持ち、待ち合わせ場所に到着。ほんとに、こんな所で釣れるのかと思っている所に浅野さんがニコニコしながら到着。浅野さんによると今まで釣れなかった事はないとの事。ちよつとブレッシャーをかけられながらも仕掛けにエサを付け川に投げ入れていく。五m間隔で、八つ程仕掛けた。もし釣れたら糸がピンと張ると教えてもらい、一つ目の仕掛けを確認しに行くと、糸がピンと張っている。

浅野さんは、ニコニコしながら釣れていると思いますよ。と言う。糸を手繰り寄せると確かに重い。そして糸の先には、スッポンが!!思わず「ウォーすごい」と叫んでしまった。

浅野さんはニコニコしていた。一時間程で七匹も釣れ師匠も僕も大満足。真相は定かではないがこの近くに昔スッポンの養殖場があり、そこから逃げ出したスッポンが繁殖したと浅野さんは言っていた。

スッポン鍋の日程が決まりしだい師匠を招待するとの約束をし、僕らは別れた。

釣ったスッポンは、ドロをはかすため二週間程流水で飼う事にし、その間スッポンのさばき方をYouTubeなどで調べ、スッポン鍋

パーティーの日程を決め参加者を募った。

パーティー当日は凄いい嵐になり、これはスッポンの怒りかとも思ってたが、参加者は嵐にも負けず沢山集まった。

スッポンをさばくのは僕にはハードルが高く手出しが出来なかったたので、一緒に食べたいと話していた森沢君がさばいてくれた。横でさばくのを見ていて、命を奪うのは尊い事で感謝して食べなければと強く思った。

今まで浅野さんもさばく事ができず食べた事がなかったらしい。初めて食べたスッポンは、魚と鶏肉の間のような感じで大変美味しかった。浅野さんをはじめとする参加者も美味しい美味いと言った。まさかスッポンを食べたいと話していた日から、こんなにすぐにスッポンを食べる事になるとはこの高知でこんなに簡単にスッポンが釣れるとは。出会いとは本当に不思議である。スッポン釣り師匠浅野さんに感謝。

しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

ジョン・ケアード演出 ハムレット

平成二十九年五月十日、かるぽーと大ホールにて開催したジョン・ケアード演出「ハムレット」。内野聖陽、貫地谷しほり、北村有起哉、加藤和樹、山口馬木也、今拓哉、大重わたる、村岡哲至、内堀律子、深見由真、壤晴彦、村井國夫、浅野ゆう子、國村隼の豪華精鋭キャスト十四人が高知に集結しました。

本作は、三十にもものぼる役柄を十四人で演じる構成となっており、ほぼすべての俳優が関係性のある複数の役を演じることにどのような意味があるのか、世界的名匠ジョン・ケアードの演出の意図とは……。高知の観客のみなさんはどのように感じましたか。

発売日から数日で完売したプラチナチケットを幸運にも手に入れた九百六十九人の観客がまず驚いたのは、そのステージでしょう。

ホール客席に入ると、舞台上には四角い空間が出現。舞台奥から手前へと傾斜のついた九メートル×七メートルの四角い何も置かれていない斜面がメインステージとなります。そのステージを横から見ると、ステージサイドシートと名付けられた階段状の客席がしつらえられています。通常の客席から見ると、ステージサイドシートの観客も舞台装置のひとつとして「ハムレット」の世界を作りあげているかのようです。

幕が上がると圧倒的な役者の存在感到観客がどんどん舞台に引き寄せられ、集中していくのが伝わってきます。ハムレットの独白に息を詰め、オフィーリアの歌声に感動し、迫力のある殺陣の場面でハラハラし……。気づくと三時間以上の芝居の中にキャストと観客が呼吸を合わせ空間を共有する、

濃密な時間がありました。アンケートには、「高知でこんなすばらしい芝居が見られるとは！」と生の演技、役者の声を感じて高い評価が多く寄せられました。同時に観劇のマナーについて残念なことがあったとのこと意見もいただきました。

今後、舞台芸術を提供することだけではなく、すべての方が心地よく舞台を堪能できる風土を育てる努力も続けていかなければならないと感じました。

（入場者数・九百六十九名）



4～6月の事業から



なんでもパーカッションとんでもサーカス

くなんとも珍しい打楽器と

まったく新しいサーカスの聴く・観るアート

二〇一七年四月三十日（日）高知市文化プラザかるぼーと小ホールにて、パーカッションとリズムサーカスのコラボレーション公演『なんでもパーカッションとんでもサーカス』を開催しました。

公演は世界的パーカシヨニスト、ヤヒロトモヒロさんによる世界の楽器紹介を交え

たワークショッップから始まり、変幻自在のリズムで大勢の子どもたちが詰めかけた会場を沸かせました。そこに弟子の誉田広耶さんが合流し演奏がパワーアップした所に、客席からリズムサーカス隊のくるくるシルクDXが登場。

まずはタップダンス、リングやピコピコハンマーのジャグリングに組体操、ラップにマーチング演奏と、パーカッションのリズムに乗せて次から次へと飛び出してくる奇想天外なパフォーマンスに観客の目は釘づけになり、会場は歓声と笑い声が溢れていきました。休憩を挟んだ第二部では、客席から数人が舞台上でのパントマイムのワークショップに参加し、初めての経験に戸惑いながらも楽しそうに挑戦していました。

終演後には竹馬を履いたメンバー達がロビーに登場してお見送りをし、観客は最後まで笑顔のまま会場を後にしました。

今回が全国初お披露目となったコラボレーション公演。今後も沢山の人を笑いと感動の不思議空間へ誘っていくことでしょう。

（入場者数・二百名）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

第六十九回

高知市展こどもアートまつり

「あなたダビンチ ぼくピカソ」

二〇一七年六月四日(日)、第六十九回高知市展こどもアートまつり「あなたダビンチ ぼくピカソ」を開催しました。六十九回を迎える市民の美術の広場「高知市展」の関連行事として、昨年までは美術体感イベントと銘打って開催していたこのイベント。今年からは「もつと子どもたちにも伝わりやすいイベント名に」と、こどもアートまつりに名前を変えて開催しました。

学校では体験できない美術本来の面白さを子どもたちに伝え、体験してもらうことを目的に、ジャンルの特性を活かした九部門十ブースを開設しました。当日は天候も良く、イベントのスタートを待ちかねていた行列が、パスポートの販売開始



村岡マサヒロ先生と4コマまんがを楽しもう

から三十分以上経ってもなぐならないほどの来場者で、熱中症予防のため「ご自由にどうぞ」と本部受付横に用意していた飲み物も足りなくなるくらい盛況ぶりでした。



筆と遊ぶう

今年も市展専門委員の皆さんには、イベント内容のほか、受付や待ち方も工夫いただき、待っている間に他のブースにも行けるよう、一回目、二回目と時間を分けて受付しているブースもありました。

毎年楽しみにしている子や初めて参加する子など、大勢の子どもたちが賑わい、それぞれのブースで思い思いに作品を作ったり、終了時刻まで夢中で取り組んでいる姿が見られました。

〈来場者数 四百八十二名〉

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



中山高陽 清水孝之 著

中山高陽

清水孝之 著

—近世土佐の文化史上、決して忘れてはならぬのが、
文人画家高陽山人の生涯と作品である

土佐の生んだ江戸文人画の祖、中山高陽の業績を明らかにした労作。
資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。(昭和六十二年刊)

価格 4,104 円 (本体価格 3,800 円 + 消費税)

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ



高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

闘鶏人生

(①平成28年2月 ②③平成28年6月 安田町)

入交 貞悦

高知城歴史博物館で開かれた「日曜市の料理教室」に参加してみた。料理は大好きで、あちこちの料理教室には顔を出す。具材が山菜や地の物を使った田舎寿司だったせいか、アラフィフの私が、かなり若者の部類。お姑さんのように主導権をしっかりと握る参加者に、嫁の気分で教えるを乞うた。自由奔放に嫁をしてきたが、半日だけの緊張感ならなんとかセーフ。お姑さんたちに高知の食文化やマナーについてあれこれ伺いながら、一時間半で、目にも鮮やかな健康血鉢ができあがった。県は文化行政の指針となる文化芸術振興ビジョンを今年度、十年ぶりに見直した。文化芸術の中には、食も入る。私自身、ビジョンの審議会に参加して、なるほどと思ったことがいくつかあった。その一つが、「高知の宴会では、お酒を注いで注がれて、お互い全く食事がとれない。結局、血鉢のお料理は残ったままでほとんど廃棄してしまう」という現実。「宴席の最初と最後まで、席について食べる」というのを勧めてはどう

宴席で「食べる」



風俗歳時記

社会での責任ある地位は移ってきた。これから私たちがゆとり世代への教育をする番である。食文化一つをとっても、伝統を重んじながら、環境問題、健康問題を踏まえて議論を進めていかないとけない。

(立花香)

猛烈サラリーマン世代から、私たちバブル世代に、

で二十本の歯を残す「8020運動」は、よく知られるようになったが、宴席では、「3010運動」を広めようという動きもある。前の三十分後ろの十分は、きちんと食べましようというものだ。

だろう」。食物廃棄の問題、作った板前さんの苦労などを考えると、とても共感を覚えた。おきやく文化は、街中でもイベントがあったり、料亭やホテルが積極的にアピールしたりして、若者世代にも随分浸透してきている。献杯・返杯で、へべれけになるのも高知らしい宴席ではあるが、健康のためにも食事は一緒にとりた。八十歳

高知のスティールパン祭 初々しい編

2017年4月に開校した、「かるぽーとパンの学校」の一期生による発表会。高知の小・中学生の、ちょっとした演奏家としての第一歩を見守って下さい。先生方によるミニコンサートもあるよ！

2017年7月29日(土)

13:30開場／14:00開演

高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

入場料:500円

全席自由・未就学児入場無料

お問い合わせ:高知市文化振興事業団(088-883-5071)

■主催:公益財団法人高知市文化振興事業団 上東パンの学校(上東を愛する会)

■助成:(公財)高知新聞厚生文化事業団 助成事業



高知でスティールパン祭 15周年編

一昨年、かるぽーとでその勇壮たるBIGバンドサウンドを披露した本格パンオーケストラ「ONE HARTZ STEEL ORCHESTRA」。主力チームである大阪メンバーの結成15周年＆全曲オリジナル2nd CD「Our heritage」発売を記念した最高にハッピー！なライブ!!!

2017年7月30日(日)

13:30開場／14:00開演

高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

一般:2,500円 高校生以下:1,000円(当日各300円増)

全席自由・75歳以上入場無料

お問い合わせ:高知市文化振興事業団(088-883-5071)

■主催:公益財団法人高知市文化振興事業団 上東パンの学校(上東を愛する会)

■助成:(公財)高知新聞厚生文化事業団 助成事業



風伯

年甲斐もなく

は三十数年前のことでスケジュールの他に、英語の文法の基本文型や覚えたいイデオム、登山の持ち物リスト(これは防災持ち出しリストにもなった)、中世を中心とした日本史年表や聴いておきたい西洋中世の音楽のリスト、添加物の種類や身体へのツボのポイントのメモなどなど、いつも手元において見れるようにしていた。

ちよつと照れくさいが、最近革製のバイブルサイズのシステム手帳を買った。古希を過ぎると書き込むほどのスケジュールもほとんど無いのに、である。このタイプのシステム手帳を買ったのは三回目ぐらいだ。最初はかなり若いころ、それなりに仕事をしていたころで、まあ役には立っていた。二回目

その後は、いつも持ち歩くスマートフォン、可哀、モバイルWi-Fiなどの登場に合わせ、ポケットに入るぐらいの、メモもできるモレスキンのスケジュール帳に変更して十数年。そして今回、三度目のシステム手帳への帰郷。数年前結婚して意欲が出てきたのかも知れない。スケジュールは相変わらず十分の一ぐらいだが、あとの十分の九は「パレットジャーナル」的な項目と(なつかしい)「夢手帳」である。なにを今更夢手帳かと恥ずかしいが、煩惱は歳とは関係なく旺盛なようで、やりたいたいことや実現したいことを書き出してみると、出てくるわ出てくるわ……。いったいお前は何歳まで生きるんだと、自分でも呆れるほどである。でもまあ自分で自分の寿命を決めることもないので、思いつくままに書き出した夢手帳をいま持ち歩いている。誰かに覗かれることがあると、それはそれは赤面モノなのだ……。 (霖)

高知市立中央公民館事業

第67回 高知市夏季大学

〇7月18日(火)

『大政奉還150年～予測不能の時代 だからこそリョーマ!!』
大友 啓史(映画監督)

〇7月19日(水)

『世界経済の真実』
萱野 稔人(津田大学総合政策学部教授)

〇7月20日(木)

『夢をつかみとるには～金メダリスト・白井健三 育成方程式～』
白井 勝晃(株式会社鶴見総合体育研究所代表)

〇7月21日(金)

『箸休めの教え』
阿川 佐和子(作家・エッセイスト)

〇7月22日(土)

『「新しいものさし」で考えよう～今、私が伝えたいこと～』
国谷 裕子(キャスター)

〇7月25日(火)

『生きた証を残すまで』
池 透暢(リデジナエノ/パリンピック ウィルチアー(車いすラグビー日本代表主将))

〇7月26日(水)

『夢の実現 ツキの10か条』
北原 照久(ブリキのおもちゃ博物館館長)

〇7月27日(木)

『「南国土佐を後」して誕生秘話、現代に何を語りかけるのか』
門田 隆将(作家)

〇7月28日(金)

『プラチナ社会に向けたイノベーション』
小宮山 宏(株式会社三菱総合研究所理事長)

〇7月29日(土)

『オッサン社会にもの申す! おばちゃん目線で世の中もわかる』
谷口 真由美(大阪国際大学グローバルビジネス学部教授・全日本おばちゃん役代表代行)

■日時

7月18日(火)～7月29日(土)〔日・月曜日は休講の10日間〕

火曜～金曜 18:30～20:00 (開場18:00)

土曜 15:00～16:30 (開場14:30)

■会場

高知市文化プラザかるぽーと大ホール

■料金

通し券(受講料は10日間通しの料金です)

一般3,600円 割引2,600円

■お問い合わせ

高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「夏の主役」

濱窪 奈央

夏になると注目を集める、主役のように活躍するモノ達を集めて、夏のにぎやかさを表現しました。

(はまくぼ なお/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



東京楽竹団 TOKYO RAKUTAKEDAN

この夏、あなたも竹に触れ、竹を奏でてみませんか?

竹楽器製作ワークショップ + コンサート出演

竹で楽器を作って翌日は東京楽竹団のコンサートにゲスト出演!

8月26日(土)
13:00~17:00 (12:30受付)

小学生以上
1~3年生は保護者同伴

【予定曲目】
竹の大地 (東京楽竹団オリジナル)
シクロに乗って (東京楽竹団オリジナル)
上を向いて歩こう (坂本九)
島唄 (THE ROOM)
じよんがら (津軽民謡) 他

※曲目は変更の可能性あります。

創作竹楽器による、安らぎと刺激に満ちた
未体験のステージを体感ください。

平成29年 **8月27日(日)**
開場 13:30 開演 14:00
高知市文化プラザかるぽーと(大ホール)

◆入場料 (全席自由)
一般 前売り 2,000円 当日 2,500円
高校生以下 前売り 1,000円 当日 1,500円
※未就学児入場無料

◆前売り券販売所
かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高知大丸プレイガイド 088-825-4335
高知大丸プレイガイド 088-825-2191
高知県立県民文化ホール 088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118
ローソンチケット(Lコード:62920)

◆主催
公益財団法人高知市文化振興事業団
さんさんテレビ

◆お問い合わせ
公益財団法人高知市文化振興事業団
高知市九反田2-1
Tel: 088-883-5071
高知市文化プラザ
かるぽーと
<http://www.bunkaplaza.or.jp>